



## 2サムエル記22章 詩篇18篇

詩18 2条 珠 2012.6.6

20/21 力王 19. 義道

23. 義道 22a/b 力王  
27-31

25. 義道 24 力王

---

27 呼声 26 感謝

29 感謝 28 願声

31 願声 30 感謝

1-11 幸 義道22章 (註)

12-18: 主は岩 主は受け石分 (註) 主は借鏡の岩

19-31: 主は羊飼 主の家に住む (註) 岩の救いの借鏡22章  
32-41 幸 義道22章 (註) (註22)

12-18 II 74(II) 22a (Ps 18) 主は岩 / 申32 主は岩  
II 74(II) 22b ダビデの最後のことば / 申33: モセの最後のことば

19-31: I 應 16: 梨子の樹のことばを賛美 / 32: 27  
I 應 17: 主の家に与る (祈願和讃集) / 32: 27, Ps 31

---

地の王が主を敬ぶ 地の諸邦が主を敬ぶ  
19-25 主は羊飼 12-17 主は受け石分  
主の力 存報(義) X 借鏡 主は羊飼の力

26-31 主の家に住む 18 主は岩  
願の声 感謝の声 主は力 敵に復讐(義)  
天の民が賛美 主は天の救いの借鏡

王(民) 主

13 喜楽 12 古語

15 古語 14 喜楽

17 古語 16 喜楽

---

18 復讐 18 救い  
46-50 1-5

18 救い 18 復讐  
20-29 6-19

18 復讐 18 救い  
27-45 30-36

詩篇18篇です。詩篇18篇は、長い詩篇ですが、第1巻の「さいわい」で始まって「さいわい」で終わっている4つに分けたときの真ん中に2つあります。12篇から18篇と、19篇から31篇。この12篇から18篇のほうは「主は岩である」、こちら(19篇から31篇)は「主は羊飼いである」というような段落になっています。敵に復讐する(12-18)、罪を赦す(19-31)、ような2つになっているようですが、18篇は、この12篇から18篇の…12篇から17篇に対して18篇というくらい大きな位置付けのある、特徴のある詩篇です。

18篇…普通は詩篇に題がついているところは、確かなものではないのですが、この18篇については、確かな出だしです。それは、第2サムエル記22章の「主が、ダビデのすべての敵の手、特に…」というところから始まる、丸ごとここに18篇が入っていて、ここから18篇を取り出しましたというものです。これはダビデの人生の最後の最後のところにこの詩が書かれていて、最後のことばという祝福のことばが23章に書いてあります。まるでモーセの申命記の最後のことばとして、申命記32章があつて、33章で祝福のことばを言うようなかたち。32章のところで、「主は岩、自分の救いの岩」。岩の歌ですね。この岩の歌と、この詩篇18篇、「わが岩、誰が岩か、ほむべきかなわが岩」というこの岩の詩篇は、そのような意味でも並行しています。



18篇は、6つの段落に分けられるだろうということで見えています。出だしの5節(1-5)と最後の5節(45-50)。これが、導入とまとめのようなものになっていて、中に4つの段落が見えます。6から19、20から29、30から36、37から45。この区分に従って見ていくと、バツテンになっているクロスのはわりはわかりやすいと思います。こちら(6-19)は敵がさばかれています。こちら(37-45)も敵が滅ぼされています。同じようなことば(30-36)は、「主の道が完全である、全きものである」。(20-29)は「全きものである、私の義に従って主の道を守り」というクロスしているところは、比較的わかりやすいかと思います。

敵に復讐される神様です(6-19,37-45)ということと、義人に報いてくださる神様です(20-29,30-36)というこのクロスですね。こちらの2つ(6-19,30-36)と20からと37からのababのa(6-19,30-36)の部分とb(20-29,37-45)の部分を見ると、こちら(a 6-19,30-36)が共通しているのは、天から、神様は…という主語のほうですね。天から神様はさばきを下す。天から救いを与えてくださる岩である。岩なる主が導いているということ。それと、その天からというのに対して、今度は報いを受ける側(b 20-29,37-45)です。これは義に従って報いを受ける。敵は神様を求めても、もう既に遅しみたいな感じですね。滅ぼし尽くされる、この諸々の国が。民を救われる、国を裁かれるということですので、主は岩であると言うときに、その岩なる神様は天から敵に復讐する。天で義しい者を支える、天から支える。その支えられている者は、主の道を歩むならば必ず救われる。天からさばいている神様に従わない者は、滅ぼし尽くされるという「天から」と「民は」という、主は岩であるということをも4つの段落で教えてくれているものだと思います。出だしは「主は岩」、最後も「主は岩」ということですが、主は岩なのですが、王様を死から救う、王を死から救い出す。そうすると、岩なる神様は、今度は民をその王を通して救われるということが、岩の、両方とも岩です、敵から救い出されますと言っているところですが、出だしのところは、どちらかというところ(右側)に頂点

があり、結論の部分は、だから、(左側)地でこのようなさばきがなされますということがわかると思うところだと思います。

1サムエル記22章は、ダビデの人生の最後ですけれど、ダビデの人生の最初のところには、ルツがいて、ルツの時代のあとに、ここで(1サムエル記2章)ハンナがいます。ハンナの祈りというのが、(1サムエル記)2章のところに書かれていますけれど、ここが「私の角」という言い方の最初の詩篇になります。「救いの角、聖なる方はありません、神のような岩はない、それで、悪者どもは闇の中に滅び失せる、天から雷鳴を響かせる、それで地をさばいて、油注がれた者の角を高く上げる」これが、18篇の短い版のようなものです。このハンナの祈りがダビデの祈りで成就していることが、ダビデもよくわかって、その言い方を使っているのだと思います。ここにハンナの2:10と書いてあったり、ここにハンナの2:2と書いてあったり、最後のところもハンナの2:10と書いてあります。それで、今度その祈りがいよいよ聞かれるというメサイアが来ましたという時に、ルカのザカリヤの祈りの中に、「闇を照らされる」とか「救いの角」という言い方で言われたりしますので、ザカリヤは18篇をもちろんよく知っていて、このメサイアが来たということを書いてあるというふうに連携していくものだと思います。

18篇自体は、主は岩である、主は受ける分である、信頼すべきゆるがない救い主であるということであらわしているこちら(表の右下18篇)の部分ですね。

願いを聞いて答えてくれるというところから始まっていますけれど、願いを聞いて答えてくれるというのは、ソロモンが祈っているように…神殿はこのためなのです。主を呼んで、主が天でそれを聞いてくれる。私たちの声を聞いてくれる生ける神である。これが、神殿の作られている意味。それは、第2歴代誌の6章に書かれています。サムエル記にもありますけれど…。第2歴代誌6章のところに、この祈りを聞いて答えて神殿を作るところです。作るところで神様が言うところです。「父ダビデが歩んだ道を歩み教えを守るならば、王座は絶たれない。」父ダビデの道なのです。主の道、主の道。その歩みというように言われていますので、ここで、ダビデ自身が歌っていますけれど、それは、主の道だと。ダビデが主の道を歩んだように、王たちがその道を歩んで教えを守るならば、王座は堅く立つということが言われています。ですから、この18篇を読んだときに、ただ何かサウロから、敵から救われたという戦いに勝ちましたということだけ…というよりは、それよりも、どうして戦いに勝てるのか、それは神様の恵みによる、約束の通りであるということが18篇でも言われていて、メサイアが来た時に、その約束の通りに救われたということをもた歌うということになります。